

[小笠原諸島固有種等遺伝資源の保護]

小笠原固有植物等の増殖技術の確立

～ テリハボクの栽培法の検討～

宗 芳光・佐藤澄仁^a・小野 剛・河野 章

(小笠原亜熱帯農業センター)^a 現農業振興課

【要 約】赤色土区の肥料 9g/ の樹高および樹径の伸長がよく、街路樹として利用可能な樹高 3m になるまでに播種から約 3 年半かかると推測された。

【目 的】

小笠原諸島は自生する植物の 42% が固有種と言われている。東京都や小笠原村ではこの自然を次世代に残し、旅行者が自然に親しみ、島民が豊かに暮らせる島づくりのために世界自然遺産への登録を目指している。そこで、植生回復や町並み等景観向上のために島内 NPO や島民から要望がある広分布植物のテリハボクを効率的に栽培する技術を確立する。

【方 法】

2005 年 1 月 31 日播種（以下、1 月播種）および 7 月 26 日播種（以下、7 月播種）のテリハボク（オトギリソウ科）の実生苗を鉢で施設栽培した。2006 年 5 月 18 日と 2007 年 8 月 10 日に鉢上げした。用土は、赤色土と育苗土（赤色土：堆肥：パーライト = 5 : 4 : 1）とした。堆肥は市販牛ふん木質系堆肥を用いた。肥料は鉢上げ時に 180 日タイプの被覆燐硝安加里（N-P₂O₅-K₂O=14-12-14）を施用し、施肥量は 0, 3, 6, 9g/ の 4 処理区（表 1）とし、各区 5 株とした。生育調査は樹高および地際部の樹径を計測した。

【成果の概要】

- 1) 樹高については育苗土で栽培した 1 月播種（図 2）を除き、施肥量に比例して伸長がよくなった（図 1, 3, 4）。樹径については 7 月播種では施肥量に比例して伸長がよくなった（図 3, 4）が、1 月播種では施肥した 3 つの区での差はなかった（図 1, 2）。
- 2) 赤色土および育苗土で栽培した 1 月播種の肥料 6, 9g/ 区では、樹高が 1m になるまでに約 1 年半、樹高が 2m になるまでに約 2 年半かかった（図 1, 2）。
- 3) 赤色土および育苗土で栽培した 7 月播種の肥料 6, 9g/ 区では、樹高が 1m になるまでに約 2 年かかった（図 3, 4）。一方、赤色土で栽培した 7 月播種の肥料 0g/ 区では播種後 2 年半経過しても樹高は 48cm であった。育苗土で栽培した 7 月播種の肥料 0g/ 区では樹高が 1m になるまでに場合では約 2 年半かかった。7 月播種の生長は 1 月播種よりも遅れた。7 月播種は生長期間である春から秋の途中に播種したために初年度の生育が遅れたと考えられた。
- 4) 病害虫はカイガラムシ類やアブラムシ類の発生がみられた。
- 5) まとめ：施肥量に比例して樹高および樹径の生長はよくなる傾向がみられた。肥料を施用しない場合では、赤色土よりも育苗土の方が堆肥の効果により生長はよくなった。もっとも生長がよい用土と施肥量の組合せは、赤色土と肥料 9g/ であった。街路樹として利用可能な樹高 3m に到達する時期は、1 月播種の肥料 9g/ 区の場合で 2008 年春から夏と見込まれ、播種から出荷まで約 3 年半かかることがわかった。今後は、街路樹および植生回復として移植し、生育調査を行う予定である。

表 1 試験区の施肥量に対する成分量

| 成分 | 0 g/ | 3 g/ | 6 g/ | 9 g/ |
|-------------------------------|---------|---------|---------|---------|
| N | 0.00 g/ | 0.42 g/ | 0.84 g/ | 1.26 g/ |
| P ₂ O ₅ | 0.00 g/ | 0.36 g/ | 0.72 g/ | 1.08 g/ |
| K ₂ O | 0.00 g/ | 0.42 g/ | 0.84 g/ | 1.26 g/ |

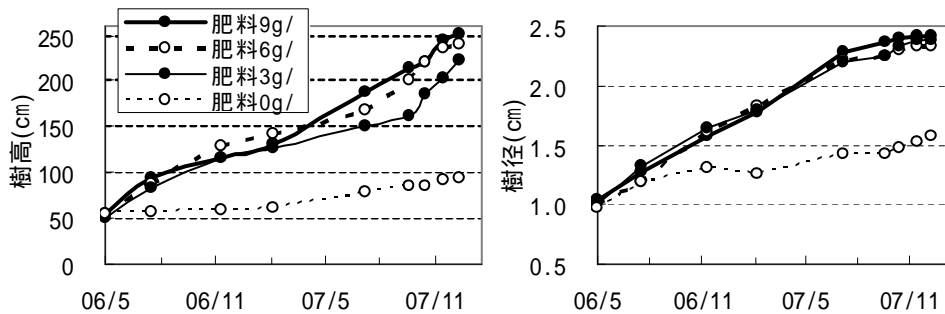


図 1 赤色土で栽培した 1 月播種のテリハボクの樹高および樹径

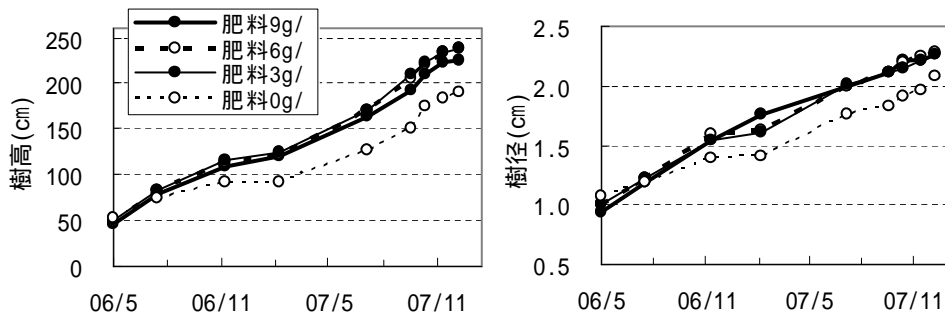


図 2 育苗土で栽培した 1 月播種のテリハボクの樹高および樹径

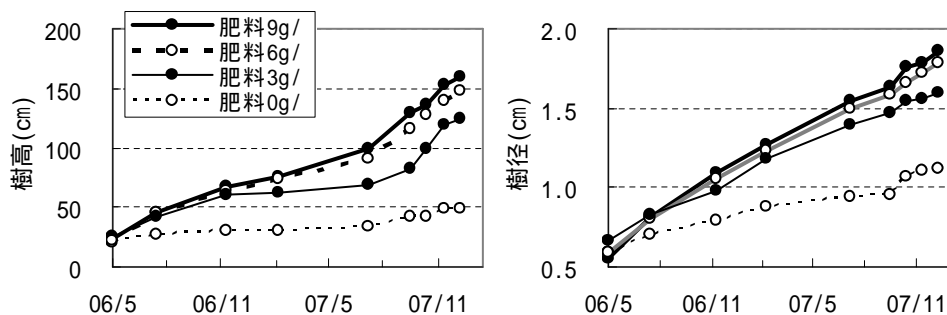


図 3 赤色土で栽培した 7 月播種のテリハボクの樹高および樹径

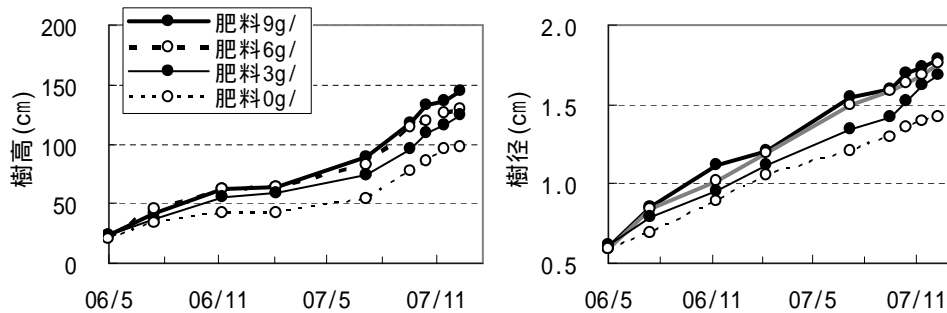


図 4 育苗土で栽培した 7 月播種のテリハボクの樹高および樹径